



2021.12

vol.229

本山 報恩講



万物一体

学校長 飯山 等

このOTANingを手に行っている時、皆さんはどのような気持ちでこの一年を振り返り、新しい年への希望を抱いているでしょうか。この感染症が社会の全領域に侵食しているようになって

以来、そのような自然な気持ちを持つことさえ、厚い蓋を被せられるような思いにさせられてしまいます。学校生活のさまざまな場面でも、明日が見通せない感覚に心身が硬直します。一方では、それゆえにこそ、と言ってよいでしょう、出来得たことに一際慶びと、あらためての感慨を抱いた一年であったとも思うことです。

この感染症はわたしたちが一つなるこの世界の住人であること、すべてとつながっている身であることを、揺るがぬ事実としてわたしたちに突きつけました。わたしたちは、どれほど密を避け、マスクをしてそのつながりを低減しようとも、その《一体の真理》の外に出ることはできません。しかしわたしは、無関心や忘却によってその真理の外に私を立てようとしません。

2021年10月・11月に実施した大谷の中学3年生、高校2年生の研修旅行は、中学はシンガポール研修から東北へ、高校は外国を含めたコース選択の研修から長崎・熊本へと変更して実施ということになりました。昨年は中高共に実施を断念せざるを得ず、今年も海外は実施不可能という状況の中で、ようやくにたどり着くことができた可能性でした。2011年3月11日の東日本大震災とそれに続く福島原発事故。1945年8月9日の長崎の原爆被災。2016年4月16日と18日の2度にわたって熊本を中心とする地域を襲った大きな地震。その場に身を置き、その時を想い、感じ、考える。私たちの「この世界」「この今」を成り立たしめている「そのこと」「その時」として。そしてその悲惨だけではなく、同時に、豊かな文化、人々の生活の歴史が息づく「わたしたちの場・今」として感じ、呼吸する。そのような時間にしてほしいと思ったことです。

現代は情報化社会と言われて、洪水にも警えられる多量の情報、一瞬も留まることなく、目まぐるしく流れ入り流れ去ってゆきます。多くの場合、わたしたちはそれらを無自覚的に「彼らのこと」、「あの世界」のこととしてしまい、わたしたちの「この世界」から切り離して、無関係な一事象としてしまいます。つかの間、後、何事もなかったかのように「あの世界」「あの時」のことになってしまうわたしたち。そ

のわたしたちが、「あの時」、「あの世界」ではなく、「この時」、「この世界」のこととして受け取り直す。「あの時」を、今の「この時」の核心に見開く。そのように、一体の真理を生きる《われら》を回復する。

「われら」の語を、「われ」+「ら」の二語から成り立つ語ではなく、《われら》という一語であり、敢えて言えば、「ら」をもって「われ」とするということと、と教えてくださった先師のことばを思い出しています。「《われら》なる《われ》」。今更のように気づいたことですが、英語のWeはIの単純な複数形ではありませんね。「われわれ」や「わたしたち」が複数性を、一人称単数の「われ」や「わたし」の複数であることを文字通り形として顕わにしている、言い換えれば「われ」や「わたし」が在っての「わたしたち」であるということとを赤裸に示しているのに対して、WeはIの単なる加算としての複数の形ではなく、まったく新しい語として、その世界が加算の繰り返しとしての複数の世界ではなく、Weという新たな世界の気づきがそこにあるということとを表現しているのではないのでしょうか。そしてそのことは、Iの発見がそこにはあるということをも。あらためてわたしが教えられるのは、Weは一体を表しているということ、そして、「わたしたち」が「わたし」の後に生じ来る語(=世界)であることを文字表現が証しているのに対して、生まれて間もないのちがまさにそうであるように、「わたし」の真実とは、Weが先立ってあり、Iが後ではないかということと。Weの息づく世界に生まれ出ることによって、はじめて、そのWeに生み育てられて、やがてIが生まれる。だから、Weの世界を持たないとき、Iは生まれない。さらに妄想は続きます。Youは単数も複数も同じですね。でも、そう考えるのがそもそも間違っていて、Youと言葉する時、Youは一体なのだということではないのでしょうか。そこでは、単とか複という数性は消えて、一体が全現しているのではないのでしょうか。もしそうではなくて、複数性が前面に出てきたときは、Youの現前性は遠ざかり、Theyになるのではと思うのです。

清沢満之先生の浩々洞は、新しい世紀を迎えた1901年、社会形成の基幹が激動する時代に向けて『精神界』を発刊して、先生はその創刊の号に「精神主義」と題する論文を発表し、続く翌月の第2号には「万物一体」と題する論文を載せて、大きく変貌する時代社会の根幹にある病質とは「万物一体」の真理からの離反であると主張されています。そのことに教えられながらこの稿を書きました。